

母乳育児期間が第二子出生に与える影響  
——福井市データのイベントヒストリー分析——

富山大学 中村 真由美

1 目的

本報告の目的は、(1)第一子の母乳育児期間が長くなると、第二子出生に影響を与えるかどうか、および、(2)母乳育児についての「指導」が実際の母乳育児期間に影響を与えるかどうか、を国内の個票データを用いて検証することである。WHO と UNICEF は 1990 年に 2 歳以上までの長期にわたる母乳育児を勧めている (Delgado et al. 2013)。これを受けて厚労省は母乳育児の推奨期間を延ばしており、結果として国内の平均母乳育児期間は延びている (水野 2004 など)。一方で、母乳育児には排卵抑制効果がある。個人差はあるものの、授乳中止まで次子の妊娠を抑制しうるということが知られている (Howie et al. 1982)。もし母乳育児に排卵抑制効果があるとすれば、推奨される母乳育児期間の延長は次子の出生を抑制する方向に働きうるのではないか。しかし、母乳育児の出産抑制効果については、途上国における研究や歴史的な研究は数多いものの、先進国を対象とした、個票データを用いた研究はほとんどない。そこで、本稿では国内 (福井市) の個票データを用い検証を行った。

2 方法

データは、2014 年に福井市で実施した『福井の家庭生活と子育てに関する調査』を用いた。福井市在住の 30 代と 40 代の女性を中心に住民基本台帳から無作為抽出し、郵送調査を実施した。送付数は 1000 件で回収率は 30.7%である。この中で子供を持っている女性 (174 件) のデータのみを分析した。手法は Cox 回帰分析と OLS 回帰分析である。出生に影響しうる他の社会的変数を統制した。

3 結果

分析の結果、長期間の母乳育児は次子出生に影響を与えており、授乳期間が 15 ヶ月以上のグループでは、それ以下のグループと比較して、第二子出生ハザード率が有意に低くなっていた。また、「卒乳まで授乳継続」を指導されたグループは、「特に指導はない」と答えたグループに比べて有意に授乳期間が長くなっており、平均で 5.2 ヶ月も長くなっていた。

4 結論

15 ヶ月を超えた母乳育児については、次子の出生を抑制する可能性があることが示された。母乳育児には様々なメリットがあり推奨されるべきであるが、特に次子を希望するケースでは、推奨する母乳育児期間に注意が必要である。

ただし、本報告で用いたデータはケース数と質問内容が限られている。今後、授乳状況についてのより詳細な設問を備えた大規模なパネルデータを実施し、改めて検証することが必要である。さらに、母乳育児指導には自治体により推進度が異なるため、母乳育児指導の地域差が地域ごとの出生率にどのように影響しているのか、検証する必要がある。

文献:

- Delgado, C., & Matijasevich, A., 2013, "Breastfeeding up to two years of age or beyond and its influence on child growth and development: a systematic review," *Cadernos de Saúde Pública*: 29(2), 243-256.
- Howie, P. W., McNeilly, A. S., Houston, M. J., Cook, A. and Boyle, H. (1982), "Fertility after childbirth: Post-partum ovulation and menstruation in bottle and breast feeding mothers," *Clinical Endocrinology*, 17: 323-332.
- 水野清子, 2003, 「改定「離乳の基本」の理解と運用」『母子保健情報』48: 5-10.